

# ニタラゴレラ

太さ6種、水平を意識した形と大きめのかな文字で読みやすい丸ゴシック書体

大人気のかな書体ニタラゴを丸ゴシック化し、プレーンな丸ゴ書体「レラ」と合体

ニタラゴレラ1

突然ゴ<sup>〃</sup>ゴ<sup>〃</sup>ゴ<sup>〃</sup>おお騒ぎ

ニタラゴレラ2

ピカピカひかる稲妻で

ニタラゴレラ3

空を切裂くカミナリは

ニタラゴレラ4

キレイに澄んだ青空を

ニタラゴレラ5

人に汚されキズついた

ニタラゴレラ6

入道雲の叫びとナミダ

●Macintoshをお使いの皆様へ

このフォントは、OS X 専用です (OS 9 以前のOSでは認識されません)

※フォントメニューに正しく表示されず、使えないアプリもあります

※アプリによっては、フォントメニューに英字名で表示される場合があります

※アプリによっては、まったく文字入力できず使えない場合もあります

※アプリによっては、拡張文字の一部が文字化けする場合があります

商品を購入する前に、ご使用予定のアプリで必ず上記の不具合をご確認ください

# マクタン島の思い出

書体制作の日々、番外編より抜粋編集

スツキリとスマート ニタラゴレラ 1

海に見えるテラスでコーヒーを飲んでから、昨晚カップ麺を食べた店にビール瓶を返却がてら朝食に行った。7時少し前で、ちょっと早い気がしたがやはり準備ができていない。約束しておいたんだがな…。

店の人はまだ寝起きの顔で支度をする気もないし、ビール瓶の返却値段でも少しモメた。この店をあきらめ、マゼラン・クロス近くの市場へ向かう。

昨日と同じ道をまた歩く。右手遠くの海を眺めながらのんびりと緩い坂道を下る。(8pt.)

何組みかの家族連れと擦れ違う。こちらのテンションもまだ低く、特に言葉を交わすわけではないが、互いに立ち停る。

興味津々の瞳と笑顔の子供たち。ただ観察しあって、伝わらない言葉を何度か発し、インスタント写真を撮ってあげる。

たった数分間の静かな交流。彼らは長い影を道に映しながらゆっくりと去っていく。

市場に入ったすぐ右側。総菜の入った鍋を5～6個店頭には並べた食堂に決め、ひとつずつ鍋のフタをあけ料理を確認。

魚のシニガンスープ、魚の唐揚げ、アズキによく似た豆を煮たもの、コーラ、ライス1皿を注文。

どれも美味しく食べられたので、明日から朝はこの店で食べることに決定。愛想のいい娘さんが心をほぐしてくれるので楽しい食事だった。(9pt.)

ホテルへ戻りひと休みすると午前9時。テニスコートで汗を出した後はプールで身体を火照りを冷ます。朝食は、小さなバナナとビール。そしてフィリピン名物のハロハロ(かき氷が入ったクリームあんみつみたいなもの)。しっかりと昼寝をした後の時刻5時。朝、偵察した市場へ向かう。まず、朝食をたべた店で挨拶をかねてビールを1本いただく。(12pt.)

夕飯もウチで食べるかと誘われたが、シーフードが食べたいからと、その店を出て海の上に張り出したテラスで食事ができる魚介類の店へ。

イカはキラウイン(フィリピン風の刺身)に、ハマグリは殻付きでバター焼き、泥ガニは中華風に炒めて貰い、ライスとビールの超特大ビン2本。

さっきの店の出戻り看板娘ポニータもいつの間にか参加して、2時間ほどのタガログ語と英語と日本語の飲み会。(10pt.)

朝食後、市場内で夕食用のレストランを物色する。熱帯特有の極彩色の魚を並べている店の殆どが、奥に座席を用意し、買った魚介類をその場で調理し食べさせてくれるようになっている。

海に張り出したテラスを持つ店に入り、少し見学させてもらう。

美しい夕焼けを見ながらの、冷たいビールと美味しい魚介類の夕食。日焼けした肌を夜の潮風が心地よく撫でていく…そんなことを想像しながら海上テラスの椅子に座った。

しかし…目の前には灰色のドロドロの海。ちょうど干潮の時間なのだ。膝くらいまで潮が引き、濁った海の中をビニール袋を持った人達が徘徊し、小魚やエビ・カニを捕っている。

変なニオイも鼻につく…。これは下水道特有のものだ。ここの市場のさまざまな排泄物(!)がたれ流しにされているらしい。(10pt.)

富栄養化された海には沢山の魚介類が育つ…。それらが市場で売られ食べられ排泄され、それを食べて大きく育ち、捕られ売られ食べられ…と、究極の食物連鎖が続いているのだ。

市場の中の店はすべて同じ状況なのだ。我々が泊まっている豪華なホテルだって、この市場から魚介類を仕入れてるかもしれないのだし。ここで見たものはすべて忘れよう!(12pt.)

飲食代金は全部で1500円ほど。満腹だ。勘定を済ませ外へ出ると周りの店は殆ど閉まり、市場はますます暗くなっていた。ホテルへ戻る道の右側にオレンジ色の街灯に照らされた怪しい店が1軒。ここ何日か、脇を通り過ぎていたサリ・サリ・ストアだ。我々はフラフラと死にかけの蛾のように店の灯りに寄っていく。灯りの下のベンチに、美しい少女が座っている…。化粧気の全く無い健康そうな少女。暑いから涼みにきているらしい十五歳の美少女に緊張し、大した会話もできない中年の男……情けない。でもきちんと写真は撮らせて貰った。蒸し暑い南国の夜。肌にまとわりつく生温かい風を楽しむように、我々はゆっくりとホテルへの暗い道を歩いた。(9pt.)

# マクタン島の思い出

書体制作の日々、番外編より抜粋編集

スツキリとスマート ニタラゴレラ2

海の見えるテラスでコーヒーを飲んでから、昨晚カップ麺を食べた店にビール瓶を返却がてら朝食に行った。7時少し前で、ちょっと早い気がしたがやはり準備ができていない。約束しておいたんだがな…。

店の人はまだ寝起きの顔で支度をする気もないし、ビール瓶の返却値段でも少しモメた。この店をあきらめ、マゼラン・クロス近くの市場へ向かう。

昨日と同じ道をまた歩く。右手遠くの海を眺めながらのんびりと緩い坂道を下る。(8pt.)

何組みかの家族連れと擦れ違う。こちらのテンションもまだ低く、特に言葉を交わすわけではないが、互いに立ち停る。

興味津々の瞳と笑顔の子供たち。ただ観察しあって、伝わらない言葉を何度か発し、インスタント写真を撮ってあげる。

たった数分間の静かな交流。彼らは長い影を道に映しながらゆっくりと去っていく。

市場に入ったすぐ右側。総菜の入った鍋を5~6個店頭には並べた食堂に決め、ひとつずつ鍋のフタをあげ料理を確認。

魚のシニガンスープ、魚の唐揚げ、アズキによく似た豆を煮たもの、コーラ、ライス1皿を注文。

どれも美味しく食べられたので、明日から朝はこの店で食べることに決定。愛想のいい娘さんが心をほぐしてくれるので楽しい食事だった。(9pt.)

ホテルへ戻りひと休みすると午前9時。テニスコートで汗を出した後はプールで身体を火照りを冷ます。朝食は、小さなバナナとビール。そしてフィリピン名物のハロハロ(かき氷が入ったクリームあんみつみたいなもの)。しっかりと昼寝をした後の夕刻5時。朝、偵察した市場へ向かう。まず、朝食をたべた店で挨拶をかねてビールを1本いただく。(12pt.)

夕飯もウチで食べると誘われたが、シーフードが食べたいからと、その店を出て海の上に張り出したテラスで食事ができる魚介類の店へ。

イカはキラウイン(フィリピン風の刺身)に、ハマグリは殻付きでバター焼き、泥ガニは中華風に炒めて貰い、ライスとビールの超特大ビン2本。

二は中華風に炒めて貰い、ライスとビールの超特大ビン2本。さっきの店の出戻り看板娘ポニータもいつの間にか参加して、2時間ほどのタガログ語と英語と日本語の飲み会。(10pt.)

朝食後、市場内で夕食用のレストランを物色する。熱帯特有の極彩色の魚を並べている店の殆どが、奥に座席を用意し、買った魚介類をその場で調理し食べさせてくれるようになっている。

海に張り出したテラスを持つ店に入り、少し見学させてもらう。

美しい夕焼けを見ながらの、冷たいビールと美味しい魚介類の夕食。日焼けした肌を夜の潮風が心地よく撫でていく…そんなことを想像しながら海上テラスの椅子に座った。

しかし…目の前には灰色のドロドロの海。ちょうど干潮の時間なのだ。膝くらいまで潮が引き、濁った海の中をビニール袋を持った人達が徘徊し、小魚やエビ・カニを捕っている。

変なニオイも鼻につく…。これは下水道特有のものだ。この市場のさまざまな排泄物(!)がたれ流しにされているらしい。(10pt.)

富栄養化された海には沢山の魚介類が育つ…。それらが市場で売られ食べられ排泄され、それを食べて大きく育ち、捕られ売られ食べられ…と、究極の食物連鎖が続いているのだ。

市場の中の店はすべて同じ状況なのだ。我々が泊まっている豪華なホテルだって、この市場から魚介類を仕入れてるかもしれないのだし。ここで見たものはすべて忘れよう!(12pt.)

飲食代金は全部で1500円ほど。満腹だ。勘定を済ませ外へ出ると周りの店は殆ど閉まり、市場はますます暗くなっていた。ホテルへ戻る道の右側にオレンジ色の街灯に照らされた怪しい店が1軒。ここ何日か、脇を通り過ぎていたサリ・サリ・ストアだ。我々はフラフラと死にかけの蛾のように店の灯りに寄っていく。灯りの下のベンチに、美しい少女が座っている…。化粧の全く無い健康そうな少女。暑いから涼みにきているらしい十五歳の美少女に緊張し、大した会話もできない中年の男…。情けない。でもきちんと写真は撮らせて貰った。蒸し暑い南国の夜。肌にまとわりつく生温かい風を楽しむように、我々はゆっくりとホテルへの暗い道を歩いた。(9pt.)

# マクタン島の思い出

書体制作の日々、番外編より抜粋編集

スツキリとスマート ニタラゴレラ3

海に見えるテラスでコーヒーを飲んでから、昨晚カップ麺を食べた店にビール瓶を返却がてら朝食に行った。7時少し前で、ちょっと早い気がしたがやはり準備ができていない。約束しておいたんだがな…。

店の人はまだ寝起きの顔で支度をする気もないし、ビール瓶の返却値段でも少しモメた。この店をあきらめ、マゼラン・クロス近くの市場へ向かう。

昨日と同じ道をまた歩く。右手遠くの海を眺めながらのんびりと緩い坂道を下る。(8pt.)

何組みかの家族連れと擦れ違う。こちらのテンションもまだ低く、特に言葉を交わすわけではないが、互いに立ち停る。

興味津々の瞳と笑顔の子供たち。ただ観察しあって、伝わらない言葉を何度か発し、インスタント写真を撮ってあげる。

たった数分間の静かな交流。彼らは長い影を道に映しながらゆっくりと去っていく。

市場に入ったすぐ右側。総菜の入った鍋を5～6個店頭には並べた食堂に決め、ひとつずつ鍋のフタをあげ料理を確認。

魚のシニガンスープ、魚の唐揚げ、アズキによく似た豆を煮たもの、コーラ、ライス1皿を注文。

どれも美味しく食べられたので、明日から朝はこの店で食べることに決定。愛想のいい娘さんが心をほぐしてくれるので楽しい食事だった。(9pt.)

ホテルへ戻りひと休みすると午前9時。テニスコートで汗を出した後はプールで身体を火照りを冷ます。昼食は、小さなバナナとビール。そしてフィリピン名物のハロハロ(かき氷が入ったクリームあんみつみたいなもの)。しっかりと昼寝をした後の時刻5時。朝、偵察した市場へ向かう。まず、朝食をたべた店で挨拶をかねてビールを1本いただく。(12pt.)

夕飯もウチで食べるかと誘われたが、シーフードが食べたいからと、その店を出て海の上に張り出したテラスで食事ができる魚介類の店へ。

イカはキラウイン(フィリピン風の刺身)に、ハマグリは殻付きでバター焼き、泥ガニは中華風に炒めて貰い、ライスとビールの超特大ビン2本。

二は中華風に炒めて貰い、ライスとビールの超特大ビン2本。さっきの店の出戻り看板娘ポニータもいつの間にか参加して、2時間ほどのタガログ語と英語と日本語の飲み会。(10pt.)

朝食後、市場内で夕食用のレストランを物色する。熱帯特有の極彩色の魚を並べている店の殆どが、奥に座席を用意し、買った魚介類をその場で調理し食べさせてくれるようになっている。

海に張り出したテラスを持つ店に入り、少し見学させてもらう。

美しい夕焼けを見ながらの、冷たいビールと美味しい魚介類の夕食。日焼けした肌を夜の潮風が心地よく撫でていく…そんなことを想像しながら海上テラスの椅子に座った。

しかし…目の前には灰色のドロドロの海。ちょうど干潮の時間なのだ。膝くらいまで潮が引き、濁った海の中をビニール袋を持った人達が徘徊し、小魚やエビ・カニを捕っている。

変なニオイも鼻につく…。これは下水道特有のものだ。ここの市場のさまざまな排泄物(!)がたれ流しにされているらしい。(10pt.)

富栄養化された海には沢山の魚介類が育つ…。それらが市場で売られ食べられ排泄され、それを食べて大きく育ち、捕られ売られ食べられ…と、究極の食物連鎖が続いているのだ。

市場の中の店はすべて同じ状況なのだ。我々が泊まっている豪華なホテルだって、この市場から魚介類を仕入れてるかもしれないのだし。ここで見たものはすべて忘れよう!(12pt.)

飲食代金は全部で1500円ほど。満腹だ。勘定を済ませ外へ出ると周りの店は殆ど閉まり、市場はうす暗くなっていた。

ホテルへ戻る道の右側にオレンジ色の街灯に照らされた怪しい店が1軒。ここ何日か、脇を通り過ぎていくサリ・サリ・ストアだ。

我々はフラフラと死にかけの蛾のように店の灯りに寄っていく。灯りの下のベンチに、美しい少女が座っている…。化粧の全く無い健康そうな少女。

暑いから涼みにきているらしい十五歳の美少女に緊張し、大した会話もできない中年の男…。情けない。でもきちんと写真は撮らせて貰った。

蒸し暑い南国の夜。肌にまとわりつく生温かい風を楽しみむように、我々はゆっくりとホテルへの暗い道を歩いた。(9pt.)

# マクタン島の思い出

書体制作の日々、番外編より抜粋編集

スツキリとスマート ニタラゴレラ4

海に見えるテラスでコーヒーを飲んでから、昨晚カップ麺を食べた店にビール瓶を返却がてら朝食に行った。7時少し前で、ちょっと早い気がしたがやはり準備ができていない。約束しておいたんだがな…。

店の人はまだ寝起きの顔で支度をする気もないし、ビール瓶の返却値段でも少しモメた。この店をあきらめ、マゼラン・クロス近くの市場へ向かう。

昨日と同じ道をまた歩く。右手遠くの海を眺めながらのんびりと緩い坂道を下る。(8pt.)

何組みかの家族連れと擦れ違う。こちらのテンションもまだ低く、特に言葉を交わすわけではないが、互いに立ち停る。

興味津々の瞳と笑顔の子供たち。ただ観察しあって、伝わらない言葉を何度か発し、インスタント写真を撮ってあげる。

たった数分間の静かな交流。彼らは長い影を道に映しながらゆっくりと去っていく。

市場に入ったすぐ右側。総菜の入った鍋を5~6個店頭に並べた食堂に決め、ひとつずつ鍋のフタをあげ料理を確認。

魚のシニガンスープ、魚の唐揚げ、アズキによく似た豆を煮たもの、コーラ、ライス1皿を注文。

どれも美味しく食べられたので、明日から朝はこの店で食べることに決定。愛想のいい娘さんが心をほぐしてくれるので楽しい食事だった。(9pt.)

ホテルへ戻りひと休みすると午前9時。テニスコートで汗を出した後はプールで身体を火照りを冷ます。昼食は、小さなバナナとビール。そしてフィリピン名物のハロハロ(かき氷が入ったクリームあんみつみたいなもの)。しっかりと昼寝をした後の時刻5時。朝、偵察した市場へ向かう。まず、朝食をたべた店で挨拶をかねてビールを1本いただく。(12pt.)

夕飯もウチで食べると誘われたが、シーフードが食べたいからと、その店を出て海の上に張り出したテラスで食事ができる魚介類の店へ。

イカはキラウイン(フィリピン風の刺身)に、ハマグリは殻付きでバター焼き、泥ガニは中華風に炒めて貰い、ライスとビールの超特大ビン2本。

二は中華風に炒めて貰い、ライスとビールの超特大ビン2本。さっきの店の出戻り看板娘ポニータもいつの間にか参加して、2時間ほどのタガログ語と英語と日本語の飲み会。(10pt.)

朝食後、市場内で夕食用のレストランを物色する。熱帯特有の極彩色の魚を並べている店の殆どが、奥に座席を用意し、買った魚介類をその場で調理し食べさせてくれるようになっている。

海に張り出したテラスを持つ店に入り、少し見学させてもらう。

美しい夕焼けを見ながらの、冷たいビールと美味しい魚介類の夕食。日焼けした肌を夜の潮風が心地好く撫でていく…そんなことを想像しながら海上テラスの椅子に座った。

しかし…目の前には灰色のドロドロの海。ちょうど干潮の時間なのだ。膝くらいまで潮が引き、濁った海の中をビニール袋を持った人達が徘徊し、小魚やエビ・カニを捕っている。

変なニオイも鼻につく…。これは下水道特有のものだ。この市場のさまざまな排泄物(!)がたれ流しにされているらしい。(10pt.)

富栄養化された海には沢山の魚介類が育つ…。それらが市場で売られ食べられ排泄され、それを食べて大きく育ち、捕られ売られ食べられ…と、究極の食物連鎖が続いているのだ。

市場の中の店はすべて同じ状況なのだ。我々が泊まっている豪華なホテルだって、この市場から魚介類を仕入れてるかもしれないのだし。ここで見たものはすべて忘れよう!(12pt.)

飲食代金は全部で1500円ほど。満腹だ。勘定を済ませ外へ出ると周りの店は殆ど閉まり、市場はうす暗くなっていた。ホテルへ戻る道の右側にオレンジ色の街灯に照らされた怪びしい店が1軒。ここ何日か、脇を通り過ぎていたサリ・サリ・ストアだ。我々はフラフラと死にかけの蛾のように店の灯りに寄っていく。灯りの下のベンチに、美しい少女が座っている…。化粧の全く無い健康そうな少女。暑いから涼みにきているらしい十五歳の美少女に緊張し、大した会話もできない中年の男……情けない。でもきちんと写真は撮らせて貰った。蒸し暑い南国の夜。肌にまとわりつく生温かい風を楽しむように、我々はゆっくりとホテルへの暗い道を歩いた。(9pt.)

# 南国の夜

昼寝をした後の夕刻5時。きのう偵察しておいた市場へ。まず、朝食を食べた店でビールを1本いただく。ウチで食べていけと誘われたがシーフードが食べたいからと、海の上に張り出したテラスで食事ができる店へ向かった。

イカはキラウイン風に、ハマグリは殻つきバター焼き、泥ガニは中華風に炒めてもらい、ライスとビールの超特大ビン2本。看板娘ボニータも参加して、タガログ語と英語と日本語の宴会が始まった。

ホテルへ戻る道の右側に、オレンジ色の街灯に照らされた侘びしい店が建っている。ここ数日、何回も脇を通り過ぎていくサリ・サリ・ストアだ。我々は死にかけの蛾のように店の灯りに引き寄せられる。

灯りの下のベンチに美しい少女が座っていたのだ…。

# 南国の夜

昼寝をした後の夕刻5時。きのう偵察しておいた市場へ。まず、朝食を食べた店でビールを1本いただく。ウチで食べていけと誘われたがシーフードが食べたいからと、海の上に張り出したテラスで食事ができる店へ向かった。

イカはキラウイン風に、ハマグリは殻つきバター焼き、泥ガニは中華風に炒めてもらい、ライスとビールの超特大ビン2本。看板娘ボニータも参加して、タガログ語と英語と日本語の宴会が始まった。

ホテルへ戻る道の右側に、オレンジ色の街灯に照らされた侘びしい店が建っている。ここ数日、何回も脇を通り過ぎていくサリ・サリ・ストアーだ。我々は死にかけの蛾のように店の灯りに引き寄せられる。

灯りの下のベンチに美しい少女が座っていたのだ…。

